『境界研究』No. 7(2017) pp. 025–044

港町マドラスにみる「境界」
── 17 世紀のクリスチャン・タウンと「ポルトガル人」──

和田 郁子

はじめに：境界の場としての港町

インド洋に大きく張り出した半島部を持つインド亜大陸では、古来数多の港町が栄枯盛衰を繰り返してきた。各時代に地域の主要港として繁栄した港町は、インド洋海上交通の要としての役割をもち、西アジアや東南アジアをはじめとする各地の港町との間を行き来する船の発着地となっていた。多くの場合、これらの港町は、陸上交通によって内陸の各地とも結びついており、それらの交通路を往復する人々によって、内陸の産物が港町にもたらされ、外来の品物が内陸の消費地に運ばれた。海陸の交通路の接点となった港町は、異なる政治支配者の下にある諸地域を結びつける場、地理的政治的な境界を超えた人々の活動の場であった。

南アジアの港町の歴史に関する研究は、とくに1980年代以降のインド洋海域史研究の発展に伴い、大きく進展した(1)。インド洋における人間の活動と深い結びつきを持つ「海のインド(maritime India)」の枠組みを取り入れ、個々の港町や沿岸の各地域に関する歴史研究が進められる一方で、長大なインドの沿岸諸地域全体を視野に入れた試みも現れた(2)。このような「海のインド」の歴史は、もちろん「陸のインド」の歴史とも相互に不可分の関係にある。この点については、しばしば海上交易が内陸の社会経済に与えた影響の観点から強調されてきた(3)。

(1) インド洋海域史研究の発展に寄与した重要な著作として、例えば以下のようなものが挙げられる。K. N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985); Ashin Das Gupta and M. N. Pearson, eds., *India and the Indian Ocean 1500–1800* (Calcutta: Oxford University Press, 1987); Kenneth McPherson, *The Indian Ocean. A History of People and the Sea* (New Delhi: Oxford University Press, 1993); Patricia Risso, *Merchants and Faith: Muslim Commerce and Culture in the Indian Ocean* (Boulder: Westview Press, 1995); R. J. Barendse, *The Arabian Seas, 1640–1700* (Leiden: Research School CNWS, 1998); Michael Perason, *The Indian Ocean* (London: Routledge, 2003); 家島彦一『海が創る文明：インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社、1993年；同『海域から見た歴史：インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会、2006年。

(2) Sinnappah Arasaratnam, *Maritime India in the Seventeenth Century* (Delhi: Oxford University Press, 1994).

(3) とくに前近代のインドに大きなインパクトを与えた16世紀以降の貴金属の流入に関しては、オム・プラカシュ (Om Prakash) による一連の研究が詳しい。代表的なものとして、Om Prakash, *The Dutch East India Company and the Economy of Bengal, 1630–1720* (Princeton: Princeton University Press, 1985); Prakash, *European Commercial Enterprise in Pre-colonial India* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998); Prakash, ed., *Bullion*

DOI : 10.14943/jbr.7.25

「海のインド」史研究の進展がもたらした変化のひとつに、ヨーロッパ諸語の史料を新たな視点から活用しようとする動きがある。ポルトガル王室によるアジア貿易への参入以来、西ヨーロッパから訪れる人々は主として海路を利用し、港町に築かれた拠点を中心に活動したため、彼らが残した記録は「海のインド」に関する情報を豊富に含んでいる。概して沿岸地域に関する現地側の史料が限られることもあり、とくに16世紀以降の「海のインド」の歴史研究は、南アジア沿岸部を舞台にした多様な人々の活動や、これらの地域の当時の社会状況を知るための史料として、ヨーロッパ人たちによる記録を積極的に活用して進められてきた。これらのヨーロッパ諸語の史料には、記録者が外部者であることに起因する誤解や思い込みに基づく叙述も含まれ、ヨーロッパ諸勢力の活動範囲に情報が偏りがちであるという問題もある。しかし、とりわけ港町の研究に関する限り、当時ヨーロッパ人自身が交易者として主要な港町に継続的に滞在し、周辺の港町の状況に大きな関心を寄せて情報を収集していたこともあって、これらの記録が重要な一次史料として活用すべきものであることは疑いがない(4)。

古くからインド洋海上交易と深い関わりのあるインドにおいて、長距離海上交通の拠点となった港町では、一般に、多様な背景を持つ人々が共存しているのが常態であった。そのような港町は、地理的政治的な境界を超えて結ばれる交通・交易のネットワークの結節点としてのみならず、様々な集団が共存する文化的社会的な境界の場としても見ることができる(5)。16世紀以降にインド洋海上交易に参入したヨーロッパ人たちは、このような多

for Goods: European and Indian Merchants in the Indian Ocean Trade, 1500–1800 (New Delhi: Manohar Publishers, 2004). 海上交易が「陸のインド」を含む広域の政治経済と不可分の関係にあったことを実証的に示した比較的早い時期の成果として、南インドに関する次の研究が重要である。Sanjay Subrahmanyam, *The Political Economy of Commerce Southern India, 1500–1650* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990).

(4) ヨーロッパ諸語の史料を活用した16–18世紀のインドの港町に関する研究はきわめて多い。ここでは、この時期の主要港に関する主な研究として数点のみを挙げる。Ashin Das Gupta, *Indian Merchants and the Decline of Surat, c.1700–1750* (New Delhi: Manohar, 1979, repr. 1994); Sinnapah Arasaratnam and Aniruddha Ray, *Masulipatnam and Cambay: A History of Two Port-Towns 1500–1800* (New Delhi: Munshiram Manoharlal, 1994); Anjana Singh, *Fort Cochin in Kerala, 1750–1830* (Leiden: Brill, 2010). 他方、ヨーロッパ語史料とインド側の史料を併せて用いた研究はそれほど多くないが、増えつつある。例えば、Genevieve Bouchon, *'Regent of the Sea': Cannanore's Response to Portuguese Expansion, 1507–1528* (Delhi: Oxford University Press, 1988); Farhat Hasan, "Conflict and Cooperation in Anglo-Mughal Trade Relations during the Reign of Aurangzeb," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 34 (1991), pp. 351–360; 長島弘「ムガル帝国スーラト港市のシャーバンダル」『東西海上交流史研究』3号、1994年、43–72頁；真下裕之「インド洋海域史における17世紀前半インド西海岸の港市Suratの一側面」*Cultural Interaction Studies of Sea Port Cities* 1 (2009), pp. 43–74; 和田郁子「ミール・ムハンマド・サイードと港市マスリパトナム：ゴールコンダ王国時代のミール・ジュムラによる交易活動と港市支配」『西南アジア研究』68号、2008年、40–62頁；同「インド・ゴールコンダ王国における君主と港市・海上交易の関係：スルターン・アブドゥッラーの治世を中心に」『東洋史研究』66号、2007年、1–27頁。

(5) 「境界」を「地理的政治的」なものと「文化的社会的」なものという二つの側面から捉える見方は、1990、91年に歴史学研究会が研究会大会の全大会テーマとして「歴史認識における〈境界〉」を企画した際に示されている。西川正雄「1990年度大会報告によせて」『歴史学研究』613号、1990年、1頁；同「1991年度大会報告によせて」『歴史学研究』626号、1991年、1頁。とはいえ、実際には、例えば「地理的政治的境界」の典型とされる国民国家の国境の成り立ちを分析するにあたっても、しばしば「文化的社会的境界」によって分けて捉えられる「民族」の問題を避けて通ることができないように、社会のなかで認知される「境界」が多面的で

様な境界の錯綜する港町の社会に新たな外来者として加わったのである。

他方、南アジアの陸地においては、歴史上、この広大な大地が唯一の政治体制の下に完全に統一されたことはなく、常に複数の政治権力が並存してきた。加えて、砂漠や山地、大森林地帯などの自然の障壁の影響もあり、各地に特色ある地域文化が発展した。その一方で、地域をまたいで移動する人々も常に存在したことから、それぞれの地域社会は様々な集団が内包される複雑な様相を呈するようになった。地理的政治的にも文化的社会的にも境界がせめぎあう状況は、海と陸の双方のインドにおいて、いつの時代も広く各地で観察されるものであった。

南アジア史研究における人間の集団の境界を問う議論は、主として、現代においても深刻な社会問題として残る、カーストをめぐる問題や宗教集団間の対立(とくにヒンドゥー教徒・ムスリム間のいわゆるコミュナル対立)やその淵源を探る視点から論じられてきた。近年の研究成果は、いずれの問題についても、ともすれば静態的で固定的なものとして捉えられがちなこれらの集団が、むしろ歴史的に変容しながら形成されてきた動態的なものであったことを明らかにしている[(6)]。とりわけ13世紀以降の前近代史については、従来の「ヒンドゥー教徒対ムスリム」という二項対立的な捉え方に対して再考を促すような実証研究が着実に積み重ねられ、さらにそのような視点でより通史的に南アジアを俯瞰する研究成果も出されている[(7)]。

以上のような研究動向を踏まえたうえで、本稿では17世紀半ばから18世紀前半の南インドの港町マドラスにおける境界に注目する。上述したように、近年南アジア史の分野では集団の歴史性を問う研究が進んでいるが、その視点は近世の港町に関する議論においてはまだあまり生かされていない。15世紀末以降に西ヨーロッパから南アジアにきた人々は、今日の国民国家の枠組みに沿って「ポルトガル人」や「オランダ人」などと呼ばれ、さらにま

複雑な諸相をもつことは言うまでもない。なお、近年、日本の歴史研究では集団の接触局面における境界の有様に注目した研究が相次いで出されている。例えば、籠田のぞ実「十字軍遠征期におけるムスリムとフランクの境界：ファルビヤーの戦いとフランク像の変容」『史滴』33号、2011年、314–295頁；草生久嗣「『ビザンツ』帝国の「ローマ人」：アイデンティティの射程」『西洋中世研究』7号、2015年、5–24頁；水谷智「英領インドにおける〈植民地的遭遇〉と女性たち：法・道徳・境界」水井万里子ほか編『女性から描く世界史：17～20世紀への新しいアプローチ』勉誠出版、2016年、255–273頁；和田郁子「『境界』を考える：前近代インド社会における婚姻と集団意識」水井ほか編『女性から描く世界史』238–254頁。

(6) カーストに関しては、この仕組みを植民地支配下において今日認識されるような形で現出してくる近代的現象として捉えた、以下のような研究がある。Susan Bayly, *Caste, Society and Politics in India from the Eighteenth Century to the Modern Age* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999); Nicholas B. Dirks, *Caste of Mind: Colonialism and the Making of Modern India* (Princeton: Princeton University Press, 2001); 藤井毅『歴史のなかのカースト：近代インドの〈自画像〉』岩波書店、2003年。

(7) 例えば、David Gilmartin and Bruce B. Lawrence, eds., *Beyond Turk and Hindu: Rethinking Religious Identities in Islamicate South Asia* (Gainesville: University Press of Florida, 2000)所収の諸論文では、古代から18世紀に至るまでの様々な事例が扱われている。また、13世紀から18世紀前半までの南アジア史を広く扱うCatherine B. Asher and Cynthia Talbot, *India Before Europe* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006)は、とくに文化史に重点を置いて多様な融合の諸相を明らかにしている。

とめて「ヨーロッパ人」として叙述されるのが一般的である[8]。しかし、史料に即して当時の港町社会の実態を見てみると、そこには今日的枠組みが必ずしも当てはまらない人々の姿が浮かび上がる。そのような人々のなかに、当時の南アジアや東南アジアの各地で見られた、混血し現地化の進んだ「ポルトガル人」がいる。本稿では、このような「ポルトガル人」が多く住んでいた初期のマドラスに焦点をおき、城壁という建造物によって構築された空間的境界と、「宗教」や「民族」として認識される、人をめぐる境界がどのように影響しあい、またそれらがどのように変わって行くのかを考える。「ポルトガル人」に対するイギリス東インド会社(EIC: English East India Company)の政策の変遷を中心に、多様に認識されていた集団の境界がひとつに収斂させられていく過程を明らかにすることを目指す[9]。マドラスの最初の約百年間における境界の変容と再構築が社会にどのような影響を及ぼしていくのかを中心に、このような事例の分析を通して、境界を歴史的に探究することの意味についても考えてみたい。

1. 港町マドラスの形成と外城の壁

1.1 ホワイト・タウン、ブラック・タウン

英領インドの主要都市として知られるマドラスについては、いわゆる「ヨーロッパ人」の租界としてのホワイト・タウンと、「インド人」居住地としてのブラック・タウンによって構成されていたとしばしば説明される。既存の研究では、この構造を前提としたうえで、実際にはブラック・タウンに住む「ヨーロッパ人」が少なからずいたことや、往来も可能であったこ

(8) ただしアンジャナ・シン(Anjana Singh)は、18世紀後半のコーチンにおける「ヨーロッパ人」を含む人間集団の境界の複雑さについて言及している。Singh, *Fort Cochin in Kerala* (前注4参照), pp. 92–96. また、植民地期の南アジアにおける「イギリス人」をめぐっては、いわゆる英印混血者のユーレイジアン(Eurasian)の位置づけや「白人性」に関する議論を中心に研究が進められている。例えば以下を参照。Durba Ghosh, *Sex and the Family in Colonial India: The Making of Empire* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006); Harald Fischer-Tiné, *Low and Licentious Europeans: Race, Class, and 'White Subalternity' in Colonial India* (New Delhi: Orient Blackswan, c. 2009); Satoshi Mizutani, *The Meaning of White: Race, Class, and the 'Domiciled Community' in British India 1858–1930* (Oxford: Oxford University Press, 2011).

(9) 18世紀初頭までの間に設定されたEICの三つの管区(Presidensy)の中心都市のうち、最も早くEICの拠点となったマドラスに関しては、後述するセント・ジョージ要塞における審議録やロンドンとの交信の記録が、20世紀初頭以来順次刊行されている。*Records of Fort St. George: Diary and Consultation Book* (Madras: The Superintendent Government Press, 1910–53); *Records of Fort St. George: Letters to Fort St. George* (Madras: The Superintendent Government Press, 1916–1946); *Records of Fort St. George: Despatches from England* (Madras: The Superintendent Government Press, 1911–1970); *Despatches to England* (Madras: The Superintendent Government Press, 1916–1932). また、1618年から84年までの在インド商館における交信については、William Foster, ed., *English Factories in India,* 13 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1906–27)およびCharles Fawcett, ed., *English Factories in India (New Series),* 4 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1936–55)があるほか、Henry Davison Love, *Vestiges of Old Madras,* 4 vols. (London: John Murray, 1913)がマドラスに関わる多くの未刊行文書からの抜粋を含む。本稿では、境界に注目して、セント・ジョージ要塞建設以来のマドラスの社会に関する従来の見方を再考する立場から、改めてこれらの基礎的な刊行史料に立ち返って検証・分析を行った。なお、近年の研究では、現地化した人々に対して"Indo-Portuguese"などの言葉を用いることもあるが、本稿では史料にあらわれる表現に基づき、「ポルトガル人」と表記する。

と、「インド人」の商人らとEICの関係の深さなどが指摘されることが多い[10]。しかし、ホワイト・タウン、ブラック・タウンの呼称は、これらの「タウン」に相当する区画が形成された当初からあったわけではない。また、それぞれの呼称が定着するまでには時間差もあった。

カール・ナイチンゲール(Carl H. Nightingale)が指摘しているように、「マドラスのアジア人地区」がブラック・タウンと呼ばれ始めるのが1660年代であるのに対し、ホワイト・タウンの呼称が定着するのは18世紀前半のことである。ナイチンゲールによると、このマドラスのケースが、「ホワイト・タウン」「ブラック・タウン」という言葉が公的な表現として使われた世界で初めての事例だという。都市空間におけるセグリゲーション(segregation)の歴史に注目したナイチンゲールは、とくに肌の色や人種(race)によって都市空間を分ける思想が18世紀以降の世界でどのように広まり実践されるのかを分析したその著において、このマドラスの事例を取り上げている。彼は、これらの呼称が生まれた背景について、「ブラック／ホワイト」という言葉がまず両アメリカの植民地において使われたこと、それがヨーロッパを経由して東方で活動するヨーロッパ人に影響を与えていたことを指摘し、EICが主導して建てたマドラスにその言葉が取り入れられていったものと考える[11]。

確かに、「ブラック／ホワイト」という色による区分は、一見したところ米国をはじめとする各地の社会に今も大きな影響を与えている問題を連想させるし、ナイチンゲールの議論は世界史的視点から見て非常に興味深いものである。しかし、彼は同時に、マドラスで始まったホワイト・タウンとブラック・タウンの区画分けは、その後の時代に発展していく人種概念とは別に考える必要があることも指摘している。「人種(race)」という言葉がマドラスを含む近世のいわゆる植民都市に関する公的な文書に現れるのは、1770年代以降のことである[12]。また、今日ではしばしば、肌の色をはじめとする身体的特徴によって人間を分類する「人種」概念の端緒となったとみなされる小論を著したフランソワ・ベルニエ(François Bernier, 1620–1688)でさえ、当時のインドで彼が出会った人々を一般に「黒い」とは表現していない。実のところ、ベルニエはこの小論のなかで「ムガル人」や「ペルシア人」を「ヨーロッパ人」と同じグループに分類する一方で[13]、別の著作のなかでは、「ムガル人」を「白人」と呼び、「異教徒であるヒンドゥー」については「褐色」と形容しているのである[14]。

(10) 重松伸司『マドラス物語：海道のインド文化誌』中央公論新社、1993年、175–196頁；羽田正『東インド会社とアジアの海』(興亡の世界史15)講談社、2007年、190–197頁。

(11) Carl H. Nightingale, *Segregation: A Global History of Divided Cities* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 2012), pp. 47–71.

(12) Nightingale, *Segregation*, pp. 72–73.

(13) François Bernier, “Nouvelle division de la terre,” *Journal des sçavans* (1684), pp. 133–140.

(14) ベルニエ著、関美奈子訳『ムガル帝国誌(一)』岩波書店、2001年、23頁。ただし、同書には、ベルニエが「インド人の召使達」について「黒く乾いて固い皮膚」をしていると述べている箇所もある。ベルニエ著、関訳『ムガル帝国誌(二)』岩波書店、2001年、230頁。なお、同書において「ムガル人」とは「白人でマホメット教徒の外国人をさすが、具体的に言えばペルシア人、トルコ人、アラブ人、ウズベク人など」である、と説明されており、ベルニエがこれらの人々を「白人」と見なしていたことが分かる。ベルニエ『ムガル帝国誌(一)』、78頁。

後述するように、初期のマドラスにおいても二つの「タウン」の空間的な境界の運用と、人間集団をめぐって認識される境界のあり様との間には深い関わりがあったが、それらの境界はいずれも、単純に「ブラック／ホワイト」という色によってのみ区切られるものではなかった。マドラスのEIC幹部が、自分たちの周囲に存在した様々な社会集団を、それぞれに異なる「他者」として認識していたことは間違いないが、自分たちとそれらの集団との間や集団相互を分ける境界を成すものとして認識されていたのは、色で表現されるものとは異なる基準であった。とくに、当時のマドラスにおいて非常に重要な存在であり、イングランド出身のEIC関係者をはるかに上回る数が暮らしていた「ポルトガル人」については、17世紀半ばまでの約100年間の間に、“警戒すべきよそ者”と“EICの協力者”とを分ける境界のどこに位置づけるかが、その境界自体の基準とともに揺れ動き、変化したのである。

次節では、考察の前提として、まずマドラスの町の誕生から城壁で隔てられた二つの「タウン」が形成されるまでの過程を概観する。さらに、EICが獲得した、一般にマドラスと呼ばれてきた地そのものの境界が当時どのように認識されていたのかについても考える。

1.2 港町マドラスの構造と境界

マドラスの町の始まりは、事実上、1639年にEICのアルマガオン(Armagaon (Arumgum))商館長であったフランシス・デイ(Francis Day)が現地の領主(ナーヤカ Nāyaka)のダーマルラ・ヴェンカタッパ(Dāmarla Vēṅkaṭappa)からこの地の租借権と要塞建設の許可を得たときに遡る。今日のチェンナイは南アジア有数の大都市だが、当時そこは少数の漁民が住む村にすぎなかった。にもかかわらずデイがここに目をつけたのは、三方を川と海に囲まれた地形を持つこの地が要塞の立地に適し、強力な防衛施設を備えた交易拠点になり得ると判断したからである。

要塞を備えた拠点を持つことは、当時のEICが年来持っていた要請であった。同時期のインドで活動していた競合するヨーロッパ勢力のうち、ポルトガルは西海岸に複数の要塞を持ち、オランダ東インド会社(VOC: Verenigde Oostindische Compagnie)も既にコロマンデル海岸中部のプリカット(Pulicat)にヘルドリア城(Casteel Geldria)と呼ばれる要塞を建てていた。これらに倣ってEICも1626年以来アルマガオンで要塞を伴う商館の運用を試みていたが、デイが商館長に就任した頃には、ここが当初期待されたような交易と防御の拠点たり得ないことが明らかとなっていた。そのため、彼はアルマガオンに見切りをつけ、別の

(15) ヴィジャヤナガル(Vijayanagar)王国において、王から知行地を与えられてその地方の統治にあたったのがナーヤカで、彼らは代わりに王に対して軍事力の提供と徴税の義務を負った。ナーヤカの存在が見られるのは、ヴィジャヤナガル王国時代のなかでも15世紀末からであり、とくにトゥルヴァ(Tuḷuva)朝(1505–1569)の下では、王とナーヤカが密接な関係を維持しつつナーヤカが地方を統治するナーヤカ制が広く行われた。しかし、より王権の弱体化した次のアーラヴィードゥ(Āravīḍu)朝(1569–1649)の時代には、ナーヤカの在地領主化が進んだとされる。辛島昇「中世国家論：ヴィジャヤナガル王国を例として」辛島昇編『世界歴史大系 南アジア史3：南インド』山川出版社、2007年、161–169頁。

候補地を探していたのである[16]。

要塞建設の許可に加えて免税などの特権をナーヤカから得られたことで、EICにとってこの地は交易の拠点としても魅力的になった。周辺には、コロマンデル海岸の主要商品である綿布の生産地があり、各種の布を安価に入手できる可能性があることも重要であった[17]。しかし、たとえこのような条件があっても、それだけで望ましい経済的利益を上げるのが難しいことは、既存の発展した港町に置かれた商館での経験から明らかであった。そこでEICは、取引の仲介者となり得る商人や、綿布生産に携わる職人集団などの有用な人々のマドラスへの移住を促進し、要塞の周りに新たな町をつくろうと試みた[18]。

1640年、デイはEICのマスリパトナム商館長アンドリュー・コーガン(Andrew Cogan)とともにマドラスに上陸し、その後間もなくセント・ジョージ要塞(Fort St. George)の建設が開始された。最初の要塞は1653年に完成したが、1644年から48年にかけて要塞建設と並行して、当時あった町全体を取り囲む塁壁が造られた。要塞の完成後には続いて外城の建設が始まり、1661年に完了した[19]。この外城の内側が後にホワイト・タウンとして知られるようになる部分であるが、17世紀を通じてここはクリスチャン・タウンと呼ばれた。他方、後にブラック・タウンと呼ばれる外城の外側は、当初ジェントゥー・タウン(Gentue Town)、アウト・タウン(Out-Town)、あるいはマラバール・タウン(Malabar Town)と呼ばれた[20]。このようにマドラスの町は、1640年からの要塞建設に始まり、居住区が拡大する一方で囲郭が次々に建てられるという形でつくられていった。

では、EICが要塞建設を認められ租借した“Medraspatam”の境界は、当初どのように定められていたのだろうか。実のところ、そもそもデイがナーヤカから得た認可状にはその範囲が明記されていない。これに関して、ラヴ(H. D. Love)は、明記がない以上、EICが獲得したのは「Madraspatamの町または村の区域内に含まれる全域」に対する権利であり、その範囲は、現在のジョージ・タウン(George Town)周辺の海岸沿いに南北約三と四分の一マイル、東西平均一マイルのエリアであったと推定する[21]。しかし、当初の租借地の範囲に

(16) Foster, *The English Factories in India, 1624–1629* (前注9参照), pp. xxi, xlii-xlviii; Foster, *The English Factories in India, 1637–1641*, pp. xxxvi–xxxvii.

(17) 和田郁子「要塞、市壁、『石の商館』：インド・コロマンデル海岸の港町 1606-1707年」『史林』95巻1号、2012年、127–128頁。このときナーヤカが提示した特権については、羽田『東インド会社とアジアの海』(前注10参照)、190–191頁。

(18) 和田「要塞、市壁、『石の商館』」(前注17参照)、128–129頁。

(19) 外城の建設完了の時期について、先の拙稿(和田「要塞、市壁、『石の商館』」(前注17参照)、129頁)の誤りをここで訂正する。

(20) Love, *Vestiges of Old Madras* (前注9参照), vol. 1, pp. 384–385, 388, 422, 432; Nightingale, *Segregation* (前注11参照), pp. 65–71. マラバールはここではタミル語、タミル語話者またはタミル人を、ジェントゥーはヒンドゥー教徒一般、あるいはテルグ語を話すヒンドゥー教徒を指す。Henry Yule and A. C. Burnell, *Hobson-Jobson: The Anglo-Indian Dictionary* (1886; repr., Hertfordshire, 1996), pp. 541–542.

(21) Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 27–28. なお、資料上に見られる綴りのヴァリアント(MedraspatamやMadraspatamなど)については、そのまま引用する。後述するNarimedoやChinapatamについても同様である。

ついて、当事者間でこのような厳密な空間認識があったかどうかは疑問である。例えば、要塞建設が認められた場所について、認可状では「Medraspatamの中もしくは周辺」とされているだけである[22]。もし「周辺」に要塞を建てられるのであれば、たとえ“Medraspatam”の区域についてのラヴの推定が正しいとしても、厳密に言えば、その区域外になるような場所での建設が可能だったことになる。そして、それが可能とされた背景には、そもそも租借地の境界が広がりのある空間(＝面)として認識されていたことにあると考えられる。

1640年代以降、コロマンデル海岸中部に支配権を主張する政治権力は、ヴィジャヤナガル王国からゴールコンダ王国、そしてムガル帝国と約半世紀の間に何度も交代した。その度にEICはマドラスで活動し続ける権利を確保するために権力者と交渉し、許可を得なければならなかったが、他方ではそれを「古来の権利」として既得権化する機会として利用した。折々の政治権力者とのやり取りや認可状の内容からは、現地におけるEICの権利と町に対する認識をより具体的によみとることができる。例えば、1672年にゴールコンダ王国の武将ニークナーム・ハーン(Nīknām Khān)から与えられた認可状では、EICの特権が認められたのは「Madrasspatamと呼ばれるところに属する土地」、「Narimedo」、「Chinapatamの町」という三つの表現で表されている[23]。ラヴによれば、これらはそれぞれ上記の旧来の村、「ジャッカル(nārī)の高台(mēdu)」を意味するテルグ語で表される土地、そして新たにつくられた要塞と町を指し、その範囲は、最初のナーヤカの認可状の内容を1645年にヴィジャヤナガル王が承認した際の勅許状に示されているものと同じであったとされる[24]。

「Chinapatamの町」とは、EICがマドラスに定着する契機となった認可状を与えたヴェンカタッパ・ナーヤカの希望で、彼の父親にちなんで新しい町に与えられた呼称である[25]。しかし、上述の認可状にはこの町の範囲が明示されているわけではない。また、マドラスが上記のように急速に形成されたことに鑑みれば、1672年には、そもそも町であると認められる範囲自体が1645年時点よりも拡大していたことは間違いない。1670年代には外城は既に造られていたが、その外側の居住区には「泥の壁」はあっても強固な外壁は未だ建て

(22) Foster, *The English Factories in India, 1637–1641* (前注9参照), pp. 156–158; Love, *Vestiges of Old Madras* (前注9参照), vol. 1, pp. 17–18.

(23) ただし、この時点でEICは他に要塞地区の南に隣接する村トリプリケーン(Triplicane)に対しても既に権利を有していたらしい。トリプリケーンの扱いに関しては、Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 349–352、ニークナーム・ハーンについては、和田郁子「ミール・ムハンマド・サイードと港市マスリパトナム：ゴールコンダ王国時代のミール・ジュムラによる交易活動と港市支配」『西南アジア研究』68号、2008年、58頁をそれぞれ参照。

(24) このとき、ニークナーム・ハーンはEICに対して、年1,200パゴダの支払いによりこれらの場所に対する権利を与えることに合意した。Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 343–347. なお、パゴダ(pagoda)とは、当時南インドで用いられていた金貨(varaha, hun)に対するヨーロッパ語史料での呼称である。1645年のヴィジャヤナガル王の勅許状については、Foster, *The English Factories in India, 1642–1645*, pp. 305–306.

(25) 概して地理的条件において突出した良港が存在しなかったコロマンデル海岸では、比較的小さな港でも、周辺地域の権力者の梃入れによって港町として発展し得た。そのような港町のなかには、発展に寄与した人物ゆかりの名を持つものも見られた。和田「要塞、市壁、『石の商館』」(前注17参照)、116–119頁。

られておらず、町の実質的な境界はまだ広がる可能性があった。それでも、その町が自領内にあって収益をもたらすのであれば、結局のところ、現地の政治権力者にとってはとりたてて問題にはならなかった。前近代のコロマンデル海岸では、政治権力者が有力な商人(集団)などに特権を与えて港町を開発させることがあったし、インド亜大陸の港町は外来者に対して開かれているのが一般的であった。そのような背景を考えると、現地の政治権力にとって初期のマドラスは、EICという外来の商人集団が開発して発展させ、君主や領主に経済的利益をもたらしてくれる自領内の港町のひとつと見なされていたと思われる。

その一方で、外城の境界は1660年代以降、壁によって明瞭に区切られていた。以下では、この限られた空間の内部での居住権を誰に認めるかという問題をめぐってあらわれた、マドラスにおけるもうひとつの――人間集団を分けようとする――境界の諸相を、とくに「ポルトガル人」に焦点をおいて見ていくこととする。

2. コロマンデル海岸の「ポルトガル人」とマドラス

2.1 マドラスのクリスチャン・タウン

EICによって新たに形成されたマドラスでは、交易を発展させ、商館を運営する人々が暮らし、敵対する勢力からその地を守るために、多くの人間が必要であった。まず、交易活動を円滑に行うためには、現地の事情に詳しい商人の仲介が必須であった。EICは綿布をはじめとする商品の確保など、マドラスにおける経済活動の多くをチーフ・マーチャント(Chief Merchant)と呼ばれた独占的な仲介商人に依存していた。マドラスでの最初のチーフ・マーチャントをはじめ、ここで活動することになる商人たちは、周辺地域から移り住んだ人々であった。また、主要商品である綿布の生産に従事する職人の移住もすすめた(26)。ところが、EICはこれらの人々の活動に大いに頼りながらも、「現地人(natives)」と位置づけた人々には外城の内側での居住を認めようとしなかった。

外城内は、既に述べたように、マドラスでは17世紀を通じてクリスチャン・タウンと呼ばれていた。そこに住んでいたのは、EICに勤務する人々や、ブリテン島をはじめヨーロッパにルーツをもつ私商人のほか、アルメニア人(アルメニア教会の信徒)や「ポルトガル人」であった。とくに「ポルトガル人」は数も多く、マドラスが町として成長していくうえで重要な役割を果たした。1673年にマドラスを訪れたジョン・フライヤー(John Fryer)は、外城の内部、つまりクリスチャン・タウンについて、イングランド人300人、「ポルトガル人」数千人と見積もっている(27)。人口の面では、当時のマドラスはその中心である外城内

(26) 和田「要塞、市壁、『石の商館』」、128頁；Kanakalatha Mukund, *The Trading World of the Tamil Merchant: Evolution of Merchant Capitalism in the Coromandel* (Hyderabad: Orient Longman, 1999), pp. 53–75, 103–167; Joseph J. Brennig, “Chief Merchants and the European Enclaves of Seventeenth-Century Coromandel,” *Modern Asian Studies* 11 (1977), pp. 321–340; Subrahmanyam, *The Political Economy of Commerce* (前注3参照), pp. 298–314.

(27) John Fryer (William Crooke, ed.), *A New Account of East India and Persia: Being Nine Years' Travels, 1672–1681,* 3

でさえ、イングランド人の町ではなかったのである。

2.2 コロマンデル海岸の「ポルトガル人」

このように17世紀後半のマドラスには多くの「ポルトガル人」住民がいたことが知られる。これらの「ポルトガル人」の大半はEICがマドラスに来る前からコロマンデル海岸に住んでいた人々やその子孫であり、またゴアを中心とする「公的な」ポルトガルの活動の範疇からはみ出した存在であった。

ヴァスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama, d. 1524)のインド亜大陸到達以来の、アジアの海域におけるポルトガル人たちの活動については、ここで改めて述べるまでもないだろう。ポルトガル王マヌエル一世(Manuel I, 在位1495–1521)は、1505年時点で獲得していた要塞や居留地をまとめ、それらの位置する海域に対する主権を主張して「インディア領(Estado da Índia)」と呼ばれる組織を成立させた。その首都は、はじめはコーチン(Cochin (Kochi))、そして1530年以降はゴア(Goa)にあった。インディア領は、「領」と呼ばれてはいるが、実際にはインド洋およびシナ海沿岸の港町に点在した拠点を結んだものであった。ポルトガルは、それらの点を結ぶ線で囲われた海域における交易と交通を管理しようと試みたが、実のところ陸上にはほとんど領土をもっていなかった。

その一方で、ポルトガル人の活動は必ずしもインディア領の範囲にとどまらなかった。ポルトガル王を統治者とするインディア領の公的な職務を負わない人々が次第に増えていき、インド洋沿岸各地に散らばっていったのである。彼らは、インディア領での勤務(通常三年)を終えても帰国しなかった元兵士や元役人、元船員、あるいは勤務を経ずに私的な商売のために来て活動していた私商人などであった。インディア領に勤務する者は、原則として任期満了後は帰国しなければならないことになっていたが、他方で、勤務を終えた者も現地の女性と結婚すれば残留することが認められていた。帰国費用が実際には自弁だったために、多数の元兵士や元船員などがこのような形で現地に住み着くことになった。彼らはカザード(casado, 既婚者の意)と呼ばれ、その多くがゴア、マラッカ、マカオなどのインディア領を形成する都市に居住したが、やがてインディア領の外にも彼らの活動は拡散していった[28]。

本稿で「ポルトガル人」と表記しているのは、現地に住み着いたこれらのポルトガル人とその子孫である。当時、ポルトガル本国からアジアに来るのは圧倒的多数が男性であった

vols., vol. 1 (London: Hakluyt Society, 1909; repr. New Delhi: Asian Educational Services, 1992), p. 107.

(28) インディア領とアジア海域におけるポルトガルの活動については、Sanjay Subarhmanyam, *The Portuguese Empire in Asia: A Political and Economic History* (Chichester: Wiley-Blackwell, 2012); Malyn Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion, 1400–1668* (London and New York: Routledge, 2005); 羽田『東インド会社とアジアの海』(前注10参照)、30–72頁；生田滋「インド洋貿易圏におけるポルトガルの活動とその影響」生田滋、岡倉登志編『ヨーロッパ世界の拡張：東西交易から植民地支配へ』世界思想社、2001年、1–50頁。

ため、実際の「ポルトガル人」社会には現地女性とその子どもである混血者(メスティーソ mestiço)が含まれていた[29]。彼らは血統的にも外見のうえでも、様々な習慣の面でも、ポルトガル本国から来たばかりの人々とは異なっていた。16世紀初頭以来増えていったインディア領に属する都市は、インド亜大陸では西海岸に集中していたが、東海岸にも「ポルトガル人」らがまとまって居住する港町が複数存在した。コロマンデル海岸では中部のサントメ(San Thome)と南部のナーガパッティナム(Nagapattinam)に多くの「ポルトガル人」が住んでいたが、とくに前者の人々は誕生したばかりのマドラスの町と深い関わりを持つことになる。

2.3 港町マドラスの「ポルトガル人」住民

サントメはセント・ジョージ要塞から五キロメートルほど南方に位置し、今日ではチェンナイ市域内の一地区となっている。ここには古来マイラープール(Mayilappur)と呼ばれた町があり、ローマや中国とも通交した海港都市として知られていた。16世紀初頭、キリストの十二使徒の一人である聖トーマスの墓廟がここで「発見」されたと伝えられたことをきっかけに、ポルトガルがキリスト教の「聖地」として開発し始めた。「ポルトガル人」の移住者が増え、居住区が形成された。彼らはその地を使徒の名にちなんでサントメ(Saõ Thomé)と呼んだ[30]。

サントメの「ポルトガル人」居住区は、インディア領に勤務しない民間の人々が寄り集まって形成されたものであった。サントメにはゴアの総督の任命を受けて居住区の監督にあたる役職者が一応存在したが、カザードを中心とするこの町の「ポルトガル人」住民たちは独立性が高く、インディア領の統制下に収まらなかった。その人口は16世紀の間に拡大し、1600年頃のサントメは長距離海上交易の拠点として繁栄していた。しかし、1610年代になってVOCが近隣の港町プリカットに定着すると、サントメはVOCとの激しい軍事的・経済的対立のなかで急速に衰退していった[31]。

その結果、EICがマドラスに来た頃には、仕事を求める貧窮した「ポルトガル人」がサントメに多数暮らしていた。このことは、セント・ジョージ要塞に拠るマドラス商館長

(29) ポルトガル王室は女性の移民をアジアに送り出す事業も行ったが、実際にやって来た女性の数は限られたものであった。C. R. Boxer, *Mary and Misogyny: Women in Iberian Expansion Overseas, 1415–1815: Some Facts, Fancies, and Personalities* (London: Duckworth, 1975), pp. 63–91; Timothy Coates, "State-Sponsored Female Colonization in the Estado da Índia, ca. 1550–1750," in Sanjay Subrahmanyam, ed., *Sinners and Saints: The Successors of Vasco da Gama* (New Delhi: Oxford University Press, 1999), pp. 40–56.

(30) 聖トーマスの伝承とマイラープールの「聖地」化については、重松『マドラス物語』(前注10参照)、105–130頁を参照。

(31) Sanjay Subrahmanyam, *Improvising Empire: Portuguese Trade and Settlement in the Bay of Bengal, 1500–1700* (Delhi: Oxford University Press, 1990), pp. 47–67, 188–215; S. Jeyaseela Stephen, *The Coromandel Coast and Its Hinterland: Economy, Society and Political System (A.D. 1500–1600)* (Delhi: Manohar, 1997), pp. 182–186; 重松『マドラス物語』、132–147頁。

(agent)（その初代が上述のコーガンである）をはじめ、マドラスの町の発展を企図する人々にとって好都合であった。ポルトガル語とカトリックの信仰を保持しつつも、タミル語を操り現地の商習慣にも通じていた「ポルトガル人」は、あるいは仲介商人として、通訳として、兵士として、セント・ジョージ要塞とマドラスの町が求める様々な役割を担うことができたのである。そのため、17世紀の歴代の商館長らは免税特権を与えたり、住居の建設費用を提供したりして「ポルトガル人」のマドラス定住を促す策を取った[32]。

当初、マドラスで働く「ポルトガル人」のなかには、ミサに参加するため週末にはサントメに帰る人々もいた。サントメの司教や、コロマンデル海岸で勢力を伸ばしていたVOCやEICに対抗するためゴアから派遣された役職者らは、このような人々に不満であったが、EICの方もマドラスの「ポルトガル人」がサントメに戻ることによってゴアの影響下に引き込まれるのを警戒していた。そのようななか、1642年にカプチン会に属する二人のフランス人神父が偶然マドラスにやって来た。彼らはもともとペグーに向かう途上であったが、「ポルトガル人」住民のためマドラスに残ってほしいというコーガンの要請を受けて留まることになった。町の中心部に提供された土地にはやがてカトリック教会が建てられた。なお、イングランド人プロテスタントのための聖職者（チャプレン）が初めてマドラスに派遣されたのは1646年である。後述するような本国の宗教事情にもかかわらず、マドラスではまず「ポルトガル人」のためのカトリック教会が建てられたのである[33]。

17世紀後半、サントメはゴールコンダ王国、VOC、そして新たにインド交易に参入してきたフランス東インド会社(CIO: Compagnie des Indes Orientales)によって陸と海の双方から度重なる襲撃を受け、ますます多くの「ポルトガル人」がマドラスに移住した。さらに、1658年にVOCによって征服されたナーガパッティナムをはじめ、コロマンデル海岸の他の町からの移住者も加わり、マドラスの「ポルトガル人」は増えていった。彼らは外城の中にも外にも住んだが、外城内つまりクリスチャン・タウンに住む富裕な人々も相当数存在した。ラヴによれば、1688年時点でクリスチャン・タウンにあった個人所有の建物128軒の半数が「ポルトガル人」のものだった[34]。この年、マドラス市の行政機関が発足し、市長(Mayor)と市参事会員(Alderman)が置かれるようになったが、12人の市参事会員のうち、EICの勤務者は三人で、フランス人商人が一人、ユダヤ人商人が三人で、「ポルトガル人」

(32) なお、マドラスに定着した「ポルトガル人」のなかには、EICとともにアルマガオンから来た人々もいた。*Diary and Consultation Book*（前注9参照）, 82 vols., vol. 1672–1678 (Madras: The Superintendent Government Press, 1910–1953), pp. 86–87; Love, *Vestiges of Old Madras*（前注9参照）, vol.1, pp. 34–35; George D. Winius, "A Tale of Two Coromandel Towns: Madraspatam (Fort St. George) and Saõ Thomé de Meliapur," *Itinerario* 18 (1994), p. 55.

(33) Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 47–50, 72–74; Winius, "A Tale of Two Coromandel Towns", pp. 55–57; Jangkhomang Guite, "The English Company and the Catholics of Madras in the Age of Religious Conflicts in England, 1640–1750," *Studies in History* 28 (2012), p. 181.

(34) Love, *Vestiges of Old Madras*（前注9参照）, vol. 1, pp. 537–538; Winius, "A Tale of Two Coromandel Towns," p. 61.

商人が二人に現地商人が三人であった[35]。

3. 「ポルトガル人」とマドラスの境界

3.1 ロンドンの視点とマドラスの現実

前章で述べたように、マドラスの商館長らは町を発展させるために「ポルトガル人」たちを積極的に受け入れようとした。しかし、他のEIC商館の幹部やロンドンの重役たちからは、このようなマドラスの方針について度々懸念や反対が表明された。その背景にあったのは、当時のブリテン島をめぐる宗教事情である。

16世紀に大陸ヨーロッパ各地を呑みこんだ宗教改革の影響は、ブリテン島にも波及し、英国国教会をはじめとするプロテスタント諸派の成立を見た。16世紀から18世紀初頭にかけては、イングランドを中心にした連合王国(United Kingdom: UK)が形作られていく時期であるが、宗教改革を経てあらわれた各宗派の活動は、国王と議会を中心とした政治的な動きと複雑に絡み合うかたちで、政治と社会の諸側面に大きな影響を与えた。EICにおいては、プロテスタント諸派が共存していた一方で、カトリックに対しては強い警戒があった。そのような立場から、マドラスが多くの「ポルトガル人」住民を抱えていることはしばしば問題視された。

例えば1642年1月27日付スーラト商館発の書簡では、セント・ジョージ要塞の立地に関して、サントメの「ポルトガル人」に近すぎることへの強い懸念が示されている。その理由は、「ポルトガル人」がこの要塞に対して実害を与えるおそれがあるためではなく、サントメから頻繁にやって来る女性たちとイングランド人兵士が結婚してしまうためだとされていた。このような懸念の背景には、「ポルトガル人」女性と暮らすことによって、カトリックの影響が兵士たちに及ぶことに対する危惧があった[36]。

マドラスにおける多数のカトリック住民の存在は、当然のことながら、国教会のチャプレンにとって大きな問題であった。1660年、マドラスのチャプレンであったウィリアム・イサークソン(William Isaacson)は、商館長トーマス・チェインバー（Thomas Chamber, 1658–1661在任）に対して、前出の二人の神父を町から追放するよう求めた。チェインバーがこれを拒否すると、イサークソンは本国の重役たちに宛てて、マドラスにおいてカトリックがいかに自由に行われているかを告発する手紙を秘かに準備し始めた。とくに問題とされたのは、神父による埋葬の儀、病気のプロテスタントの兵士に対する神父によるカトリックへの入信の勧め、そしてカトリックの母を持つイングランド人の家を神父が訪れ新生児に洗礼を施していることであった。この告発の目論見は、その手紙の写しがスーラト商館長マシュー・アンドリューズ(Matthew Andrews)の手に渡り、本国に送られる前に知ら

(35) Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 497–503; 羽田『東インド会社とアジアの海』（前注10参照）、197頁。
(36) Foster, ed., *The English Factories in India, 1642–1645* (前注9参照), p. 12.

れるところとなった。アンドリューズはチェインバーに対して、このような神父らの活動を止めさせ、彼らを町から追放するように求めた[37]。

しかし、チェインバーはこれに従おうとしなかった。その理由として彼は、(1)神父がいなければ、「ポルトガル人」たちはマドラスを離れてしまう、(2)件の神父たちは「ポルトガル人」を住まわせるために町に招かれた人々である、(3)町からキリスト教徒の人口を減らすことは要塞の弱体化につながる、(4)「ポルトガル人」が住むことは交易と会社が得る関税を増やすことになり得る等を挙げている。マドラスにおいてチェインバーが直面していた現実は、ここでは「ポルトガル人」住民の力に依存する部分が大きく、彼らを引き留めておくためには神父に居てもらわなければ困る、というものだったのである。チェインバーはこのことを本国に対しても訴え、この神父たちが自分の前任者たちの時代からずっとマドラスにいたこと、そして今は非常に多くの「ポルトガル人」がいるので今まで以上に彼らに居てもらう必要性があることを述べている。ただしその一方で、チェインバーは神父たちに対して、今後公に葬列を出すことや、国教徒にカトリックへの入信を「そそのかすこと」を止めるように告げたともいう[38]。

その後、プロテスタントであることを重視する本国の意向と、セント・ジョージ要塞と港町マドラスの現実の間で、マドラス商館による「ポルトガル人」の扱いは揺れ動くことになる。チェインバーの後任となったエドワード・ウィンター (Edward Winter) は反カトリック的な方針を取り、彼の任期中(1662–1668)にカトリック教徒は二度にわたって町から追放された。ウィンターの後任の二人はより寛容だったので「ポルトガル人」たちも町に戻ったが、他方で本国からはチェインバーのときと同様の不満や懸念が示された[39]。例えば、1676年に本国から派遣されてきたコミッショナーのウィリアム・パックル(Major William Puckle)は、多くのイングランド人がブラック・タウンに住んで住居費を払っているのに、「なぜこれほど多くのポルトガル人とメスティーソ(mestizas)が『イングリッシュ・タウン』に居住を許され」、住居についての優遇を受けているのか、と問うている。それに対し、当時の商館長ウィリアム・ラングホーン(William Langhorne, 1672–78在任)は、「ポルトガル人」を定住させようとしてきた前任者たちによる上記のような政策の必要性を説明しているが、このやり取りはロンドンとマドラスの温度差を如実に表しており興味深い[40]。また、パックルの言う「イングリッシュ・タウン」がクリスチャン・タウンを指していること

(37) Foster, *The English Factories in India, 1655–1660* (前注9参照), pp. 403–404; Guite, "The English Company and the Catholics of Madras" (前注33参照), p. 186.

(38) Foster, *The English Factories in India, 1655–1660* (前注9参照), pp. 405–406; Foster, *The English Factories in India, 1661–1664,* pp. 32–33; Love, *Vestiges of Old Madras* (前注9参照), vol. 1, pp. 181–184; Guite, "The English Company and the Catholics of Madras," pp. 186–188.

(39) Frank Penny, *The Church in Madras* (London: John Murray, 1904), pp. 71–72; Guite, "The English Company and the Catholics of Madras," pp. 189–192.

(40) *Diary and Consultation Book* (前注9参照), vol. 1672–1678, pp. 86–87.

は明らかだが、ここにもマドラスの町の性格や位置づけに対するロンドンとマドラスの認識のずれが垣間見える。ロンドンから来たばかりのパックルにとって、マドラスの中心部は当然「イングリッシュ」でなければならなかったのだろうが、実のところ当時のマドラスでは「ポルトガル人」の方がはるかに多かったのである。

続いてマスター（Streynsham Master, 1678–81在任）が商館長になると、再び反カトリック政策に舵が切られた。1678年、現にEICに勤務しているイングランド人であってもカトリック教徒は要塞の守備隊から解雇することと決議された。実際に兵士の中には「ポルトガル人」女性との結婚後にカトリックに改宗した者がいたとされ、同様の事例が増えることへの懸念から、異宗派間結婚の是非をめぐる議論が展開された。結局マドラスではこれを禁じるまでには至らなかったが、結婚に際してはチャプレンの前での誓いが必要で、生まれてくる子どもはプロテスタントとして育てられること、と定められた。この頃、マドラス初の国教会となるセント・メアリ教会の建設も開始された。建設の初期費用は、マスター自身をはじめ当地のプロテスタント住民の寄進によって賄われていた。しかし、このようなマスターの明確な反カトリック政策があった一方で、1680年代には宗教に関する指示がロンドンの重役から出されない状態が続いた。Jankhomang Guiteによると、これは名誉革命(1688)に至るまでの英国内の宗教政策をめぐる不安定な状態を反映していた。マドラスでも、この頃までは決定的なカトリック排除の方針は示されなかった[(41)]。先述の結婚と子どもに関する規定に対しても、正式な婚姻を避けてイングランド人男性と暮らし、且つ子どもをカトリック教徒として育てるという方法を選ぶ「ポルトガル人」女性がいたとされる。このことは、EICが容易に管理しきれないマドラスの現実の一端を示すものである[(42)]。

3.2 変容する「ポルトガル人」の境界とホワイト・タウンからの追放

1690年代の前半、本国での情勢の安定化と連動するように、マドラスでも国教会を優先する姿勢が明らかになる。1692年、本国からポルトガル語に堪能な聖職者が「プロテスタントのポルトガル人の教会」のために派遣された。彼らに期待されたのは、カトリックの「ポルトガル人」をプロテスタントに改宗させることであった。しかし、間もなくこの試みにはあまり効果がないことが判明する[(43)]。

(41) その背景には、宗派の違いにもかかわらず、1640年前後からの英葡関係が概ね良好に推移していたことの影響もあったと考えられる。1640年にポルトガルがスペインから独立した際には、インドにおいてもEICの親善使節がゴアに送られているし、ボンベイがポルトガルの王女の持参金の一部として英王室に譲られたことはよく知られている。Afzal Ahmed, *Indo-Portuguese Trade in Seventeenth Century (1600–1663)* (New Delhi: Gian Publishing House, 1991), pp. 62–65.

(42) *Diary and Consultation Book*, vol. 1678–1679, p. 68; *Diary and Consultation Book,* vol. 1680–1681, pp. 18–19; Penny, *The Church in Madras*, pp. 71–91; Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, pp. 423–427; Guite, “The English Company and the Catholics of Madras,” pp. 192–194.

(43) Penny, *The Church in Madras*, pp. 108–117; Love, *Vestiges of Old Madras*, vol. 1, p. 548; Guite, “The English Company and the Catholics of Madras,” pp. 192–194.

その一方で、この頃からマドラスにおける「ポルトガル人」の捉え方に変化が生じ始める。1698年には、「当地のポルトガル人住民」から「他のあらゆるキリスト教徒と同じ五パーセントの関税の支払い」で交易活動を行うことを認めてほしいという要請が出ていた。これに対してセント・ジョージ要塞では、「ヨーロッパのポルトガル人とヨーロッパ人の両親から生まれた者は五パーセントだけを支払い、その他の全ての者は、ローマン・カトリックを奉ずるマラバール人(Mallabars)などの教派の下に入るので、上記の五パーセントの関税に加えてペッダ・ナーヤカの税(Peddy Naigues duty)を支払うこと」と決議した(44)。ここでは、「ポルトガル人住民」が「ヨーロッパ人」の血統の者と「他の全ての者」とに差別化されている。そのうえで、非「ヨーロッパ人」と見なされた「ポルトガル人」はタミル人キリスト教徒と同様の存在であり、市外の現地人居住地区の治安を管理するペッダ・ナーヤカの管轄下にあると見なし、「ヨーロッパ人」キリスト教徒とは別に扱うことが明示されている。確かに、それまでのEICの文書においても、血統によって「ポルトガル人」を分類するメスティーソやカスティーソ(Castiço:「血統の良い、純血の」の意。純血ポルトガル人を指す)の言葉はポルトガル語から取り入れられて使われてきたが、公的には、混血であろうがなかろうが「ポルトガル人」は外城内に居住権を持つ「キリスト教徒」と一括して扱われてきた(45)。これに対して、ここでは「ヨーロッパ人」の血統が守られているか否かが課税の条件として、つまり公的な資格に関わる条件として示されている。「ポルトガル人」をめぐる認識の境界はこのように変化しようとしていた。

さらに相前後して、今度は「ブラック／ホワイト」の言葉で人を分類する表現が見られるようになる。ナイチンゲールによると、マドラスにおいて「ホワイト・タウン」「ブラック・タウン」の呼称が公式に使われるのは、トーマス・ピット(Thomas Pitt)（セント・ジョージ要塞のプレジデント、1698–1709在職）が1711年に作らせた地図が最初とされるが、「ブラック／ホワイト」が人に対して用いられている事例は、それより若干早く見出だされる(46)。

(44) *Diary and Consultation Book*（前注9参照）, vol. 1698, pp. 125–126. ペッダ・ナーヤカ(pedda nāyaka)は “Peddanaikpetta” と呼ばれた市外の居住区＝村落地区に発展した町の警護役で、治安と商取引の違法取締りに関する実権を持っていた。詳しくは、重松『マドラス物語』（前注10参照）、189–191頁の「ペータ・ナーヤカ」に関する記述及び以下を参照。Sinnappah Arasaratnam, “Factors in the Rise, Growth and Decline of Coromandel Ports, Circa 1650–1720,” *South Asia: Journal of South Asian Studies* 7 (1984), pp. 19–30.「マラバール人」については前注20を参照。

(45) 例えば、1679年1月、1687年2月時点での自由市民のリストに見える妻に関する記述が挙げられる。*Diary and Consultation Book*, vol. 1678–1679, p. 168; Love, *Vestiges of Old Madras*（前注9参照）, vol. 1, pp. 484–485.

(46) マドラスでは、「ブラック・タウン」の呼称の方がより早く(17世紀後半から)使われていた。北米植民地などの他地域におけるイギリスの経験との比較や相互影響も含めた「ホワイト・タウン」「ブラック・タウン」の二分法の成り立ちについては、Carl H. Nightingale, “Before Race Mattered: Geographies of the Color Line in Early Colonial Madras and New York,” *The American Historical Review* 113 (2008), pp. 48–71; Nightingale, *Segregation*（前注11参照）, pp. 47–74を参照。「ブラック／ホワイト」を人に対して使った事例については、例えば*Diary and Consultation Book*, vol. 1707, pp. 55, 80, 86; *Diary and Consultation Book,* vol. 1709, pp. 97–98に見ることができる。

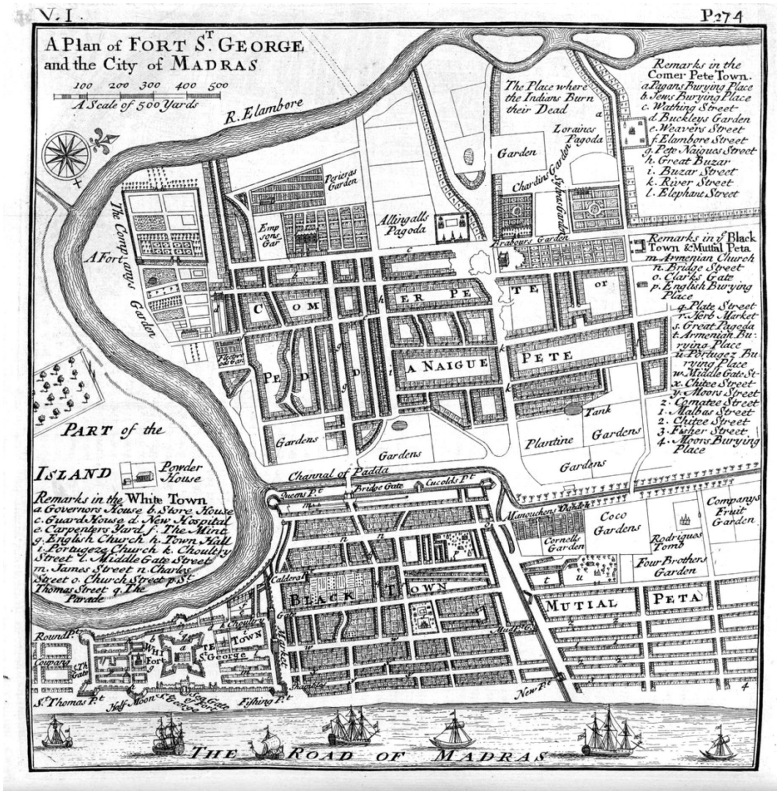

図１ 18世紀前半のマドラス平面図

出典：Thomas Salmon, *Modern History: or, the Present State of all Nations* (London: Bettesworth & Hitch, 1739)所収。

ただし、「ホワイト・タウン」「ブラック・タウン」の呼称が、その後作られた地図において継続的に見られるのに対して、人を分類する言葉としての「ブラック／ホワイト」は導入され始めたものの、この時点ではまだ後の「人種」概念と直結するような運用はされていない。

実際に、血統に関わらずカトリック教徒をひとまとめに敵と見なす姿勢は、18世紀に入っても根強く示されていた。ただし、それは以前のように本国における宗派対立を反映したものというより、むしろマドラスをめぐる情勢が変化していくなかで、より政治的・軍事的な問題へと形を変えて意識されるようになってきたものであった。マドラスの南方に位置する港町ポンディシェリ(Pondicherry)に定着したCIOとの競争は、1690年代にはEICにとって大きな問題となりつつあった。18世紀初頭までには経済的にも軍事的にもEICにとって無視できない勢力に成長してきたフランスと協力する可能性があるとして、カトリック教徒は警戒すべき対象と見なされるようになった。コロマンデル海岸におけるCIOの脅威が増すにつれ、マドラスとその周辺地域の「ポルトガル人」に対する警戒も高まった。

1740年にヨーロッパでオーストリア継承戦争が勃発すると、英仏の対立はヨーロッパ域内のみに留まらず、やがて南インド・コロマンデル海岸における双方の東インド会社間での戦いを引き起こした。そして、1746年、マドラスはCIOの軍の攻撃を海陸双方から受けて陥落した。その後に続いたCIOによるマドラスの占領期(1746–1748)に、EICの「責任ある地位」からカトリック教徒を追放する旨の通知が出された。その後マドラスは再びEICの手に戻ったが、それから間もなくカトリック教徒のホワイト・タウンからの追放が決議され、「ポルトガル人」もその対象となった(47)。

おわりに

このようにして、マドラスの外城内での「ポルトガル人」との共生は終わりを告げた。もちろん、マドラスでは以前から多くの「ポルトガル人」がブラック・タウンでも暮らしており、ホワイト・タウンからの追放がそのまま「ポルトガル人」のマドラスからの排除を意味したわけではない。しかし、この出来事は、マドラスの中心部からそれまで多数を占めていた「ポルトガル人」を追い出し、その区画をホワイト・タウンとして明確に位置づけなおしたという点で重要である。それは、クリスチャン・タウンからホワイト・タウンに至る外城内の呼称の変化に象徴される、空間的境界の位置づけの変化と、メスティーソを多く含む「ポルトガル人」という集団をめぐる認識の境界の変容が相互に影響しあって生じた出来事であった。

マドラスにおいて、外城の壁によってつくられた空間的境界が1660年代から存在していたことは確かだが、外城内を指す呼称の変化は、その境界に与えられた社会的な意味がマドラスをめぐる情勢が遷移するなかで変わってきたことを示している。「ポルトガル人」はこの新興の港町の防衛に必要な兵士の供給源であり、クリスチャン・タウンの呼称はその彼らを取り込む理由付けとして有効であった。ただし、それは本国からはなかなか理解されないマドラスの事情でもあった。パックルの言葉にある「イングリッシュ・タウン」はその齟齬を象徴的に示していると言えよう。本国から見た「クリスチャン・タウン」は「イングリッシュ・タウン」であるべきであり、ロンドンの視点では“正しいクリスチャン”はプ

(47) *Diary and Consultation Book* (前注9参照), vol. 1749–1750, pp. 1–4; Love, *Vestiges of Old Madras* (前注9参照), vol. 2, pp. 396, 403; Guite, “The English Company and the Catholics of Madras” (前注33参照), pp. 194–201; Nightingale, *Segregation* (前注11参照), pp. 70–71. なお、このときアルメニア人もホワイト・タウンから追放されたが、マドラスはその後もアルメニア人のグローバルな経済活動の拠点として機能し続けた。17–18世紀のコロマンデル海岸におけるアルメニア人の活動については、下記を参照。Bhaswati Bhattacharya, “Making Money at the Blessed Place of Manila: Armenians in the Madras–Manila Trade in the Eighteenth Century,” *Journal of Global History* 3 (2000), pp. 1–20; Bhattacharga, “Armenian European Relationship in India, 1500–1800: No Armenian Foundation for European Empire?” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 48 (2005), pp. 277–322; 重松伸司「17–18世紀初頭のインドにおけるアルメニア商人とイギリス東インド会社」守川知子編『移動と交流の近世アジア史』北海道大学出版会、2016年では、他の港町や内陸諸都市を含めたインド亜大陸各地のアルメニア人居留地や、アルメニア人とEICの交易関係について取り上げている。

ロテスタントであるはずだったのだろう。1690年代になり、フランスの台頭によって、コロマンデル海岸における勢力図がヨーロッパにおける対立の構図と明確に重なる様相を呈し始めると、マドラスにおける「ポルトガル人」をめぐる境界も次第に揺らぎを見せるようになる。その過程において、従来は混血者も含め一括して「ポルトガル人」と見なされていた集団に対してヨーロッパの血統を重視した区分が適用されたことは、EICと「ポルトガル人」との間の境界を新たな観念に基づき引きなおすことにつながったと考えられる。最終的に「ポルトガル人」がホワイト・タウンから追放され、クリスチャン・タウンの呼称が消え去ったとき、「ポルトガル人」が宗派は異なるが“同じキリスト教徒”であるということは、少なくとも公的にはもはや重視されなくなったのである(48)。

しかし、ここで注意しておかなければならないのは、EICの史料からは、この地域の「ポルトガル人」の集団としての性質が1640年からの約一世紀の間に大きく変化したとEICの関係者が認識していたようには見えない、ということである。そもそも、サントメの「ポルトガル人」はゴアの総督府の管理とはほぼ無関係に暮らす現地化の進んだ人々であった。マドラスにおける町の建設が始まったときから、彼らはカトリックであり、混血者を含んだ集団だということが知られていた。その彼らを、“同じキリスト教徒”と見るか、“異なる宗派の他者”と見るか、あるいは“混血の他者”と見るか――それらはすべて彼らとどのような関係性にある人々の視点で見るか、ということと深く関わっている。本稿では、あくまでもEICの公的な立場から見た境界を扱ってきたが、EICの内部においてさえ、ロンドンの重役にとっての「ポルトガル人」とマドラスの幹部にとっての「ポルトガル人」は異なる位置づけで捉えられることがあった。このことは、ある集団の境界が、たとえ同時代の同じ組織(国家、会社等)に属する人々の間でも、そしてたとえ同じ言葉で呼ばれていても、必ずしも一致するものではなく、また情勢や関係性の変化によって変容し得ることを示唆している。

人間はその長い歴史の中で、さまざまな社会を形成し、さまざまな仕組みや制度を用いてきたが、それらは必ずしも今日の私たちになじみ深いものであったり、容易に想像し得るものであったりするとは限らない。歴史学の手法によって、今は失われてしまったこれらの仕組みや、その背後にあった考え方などを探り出すことは、今日、広く知られているものとは違う見方を考えるうえで役に立つだろう。本稿で紹介したのは境界をめぐる前近代の事例のひとつに過ぎないかもしれないが、もし現代社会で起きている多くの衝突の背景に、「宗教」や「民族」によって人々を“根本的・絶対的に異なる存在”として分ける見方に起因する差別や反感のような意識があるとすれば、このような前近代史の研究を通してこれらの違いを相対化する視点を提供することには、現代的な意義があるとも言えるので

(48) ただし、私的な領域での接触は別である。とくに、男女関係において、公的に定められたあるべき境界がしばしば容易に超えられてしまったことについては、別の機会に扱いたいと考えている。

はないだろうか。